



こーひーぶれいく

観光列車を満喫する

渡部 直史

Watabe Tadashi

最近、家族でハマっているのは鉄道旅行、特に観光列車の旅である。最初に観光列車に乗ったのは2022年5月、JR四国が運行する「四国まんなか千年ものがたり」であった。同列車は多度津駅（香川県）～大歩危駅（徳島県）の間を主に週末に1日1往復する観光列車であり、3両編成の車内はテーブル付きボックス席（2～4人用）がゆったりと配置されている。大歩危・小歩危といった風光明媚な渓谷沿いをゆっくりと走りながら、車内でコース料理をいただくことができる。窓からの景色を楽しみながら美味しい食事を満喫し、更に途中の駅でおもてなしを受けるというまさに、観光を楽しむ列車である。途中の停車駅のおもてなしでは、駅前でのダンスショー、ホームの特産品販売コーナーでのショッピング、車掌コスチュームを着ての記念撮影等、様々なイベントがあり飽きることはなかった。更にはスイッチバックでしかアクセスできない秘境駅の坪尻駅にも途中停車する等、鉄道オタクの息子にとってはたまらないイベントも含まれていた。また観光列車が通るたびに沿線の地元の人達が列車に向けて手を振ってくれることから、地域ぐるみで観光列車を盛り上げようとしている雰囲気を感じた。いずれにしても期待を大きく上回る充実ぶりであったことから、それ以降家族ですっかりハマってしまい、定期的に観光列車に乗る旅を企画している。

2番目に紹介したい観光列車は富山平野を横断する、あいの風とやま鉄道の「一万三千尺物語」である。富山駅を起点に複数のコースが運行されているが、立山連峰（標高約3000m）と富山湾（水深約1000m）の景観美を車窓から楽しみつつ、美味しい料理を車内で楽しむことができるダイニング列車である（一万三千尺は高低差の約4000mに由来



写真 平成筑豊鉄道 ことこと列車にて

する)。食事については車内で職人さんが鮓を握っており、富山湾の海の幸を美味しい日本酒と共に満喫することができる。我々が乗車したのは2024年4月であったが、残雪が残る立山連峰の景色が本当に美しかった。また「敵の城が海に映って見える」と上杉謙信を驚かせた「蜃気楼の街」魚津にも停車し、途中駅での観光も満喫することができた。

3番目に紹介したいのは観光列車ではないが、秘境駅の宝庫として知られる北海道の宗谷本線である。2024年の夏休みに息子と稚内を訪問し、日本最北端の無人駅かつ秘境駅の抜海駅を訪れたことはとても印象深かった。スケジュール上、息子が稚内駅から普通列車に乗車し、私が抜海駅で到着を待つという形であったが、まず抜海駅に向かうまでの道が日本とは思えないようなスケールの一本道がずっと続く直線道路で右側に日本海という展望であった。また抜海駅の近くには民家が1軒のみであり、静けさに包まれている中、稚内からの列車が近づくと、踏切の警告音と共にゆっくりと1車両のみの列車が入線してくるという鉄オタの息子にはたまらない情景であった。残念なことに抜海駅はその後に廃止となってしまったが、駅舎も情緒のある佇まいを残しており、JR北海道には観光スポットとして、このような秘境駅をぜひ継続保存してほしいと強く願っている。

その他、JR九州では鉄道デザイナーの水戸岡鋭治氏がデザインした列車（特急・新幹線を含む）が多く走っているが、観光列車（「特急36+3」、「或る列車」等）では豪華な車内でゴージャスな雰囲気を楽しむことができる等、地域によって、それぞれの特徴を生かした観光列車が運行されており、飽きることはない。皆さんもぜひ仕事の合間に観光列車の旅を企画されてみてはいかがでしょうか。

（大阪大学）